失われゆく延喜式内社を求めて【第九回】 青年版国民栄誉賞〝人間力大賞〟受賞者

延喜式内 名神大社・忌部神社

オキタリュウイチ

天皇即位に際して麁服を調進し、即位の式である大嘗祭を取り仕切っていた阿波忌部氏。徳島県内に複数存在する「忌部神社」は、その祭祀一族の足跡と面影を今に伝えています。今回は、忌部の祖神をまつる忌部神社を巡り、歴史上における阿波忌部氏の役割とルーツを辿ります。

オキタリュウイチ　クリエイティブディレクター
昭和51（1976）年、徳島県生まれ。早稲田大学中退。行動経済学に基づく経済心理学を独自の手法でマーケティングに応用し、数々の事業再生に従事。京都の老舗米屋をネットで17億の売上にするなど、驚異的な成果を生み出す。同時に社会活動家として、自殺者撲滅や障害者の起業支援を日本財団と共催するなど、社会的課題の解決にも取り組む。

祭祀の神、天太玉命から連なる系譜

――日本の神道にとって欠かせない神なのですね。なぜそんな神社があまり知られていないのでしょう。「忌部神社」と名がつく神社は、徳島県内に複数存在するようですが、ガイドブックにも詳しい説明はありませんし謎が多いです。

オキタ／私もそのことが長年気がかりでして、忌部神社の門家宮司をはじめ、各忌部神社の関係者の方々や有識者への取材を続けています。何せ古代に由来する事象なので、不確定なことも多いのですが、見えて来た事実も多くあります。

もともと阿波忌部氏は、三木氏や後藤田氏はじめ二十家余り存在しましたから、それぞれの家ごとに祖神を祀っていたのではないかと考えられます。古代の祭祀法は、自然のなかに神籬（ひもろぎ）を設置して行うものでしたから、その多くは形として残りません。その一部が神社の社殿としてかろうじて残されたものが、徳島県内に伝わる忌部神社ではないかと考えています。

――一般の人でも参拝しやすい「忌部神社」はありますか。

オキタ／徳島市の中心部、市街地のすぐ側に代表的な「忌部神社」があります。徳島駅から、バスを使って十数分程度で行ける場所ですね。

こちらの忌部神社（徳島市二軒屋町）は、明治25年に当時の太政官、すなわち明治天皇の御意志で現在の地に遷座された神社であり、格式の高い御社です。眉山（びざん）の中腹に位置し、徳島市を一望できる見晴らしのよさも魅力です。観光のメインコースに位置していますので、私は過去にたくさんの外国人をこちらに案内しています。

――その他の忌部神社は、行くのが困難な場所が多いのでしょうか。

オキタ／まさにお察しのとおりで、こちらの二軒屋町の忌部神社以外は、市街地から離れた場所にあり、山の山頂など、気軽に行けない御社が多いです。

例えば、麻植郡山崎村（現 吉野川市山川町）に山崎忌部神社、種穂（たなほ）忌部神社の二社が坐しますが、こちらに行くためには、車で長時間山頂まで登らなくてはならず、しかも地元の人でも詳しい道のりを知らないため、道に詳しい専門家を同伴しなければなりません。私も知人が運転するバイクに乗せてもらって、ようやくたどり着けたほどでした。

ちなみに、種穂忌部神社にいたっては車が通れないほど急勾配を延々と登らなくてはなりません。しかし、そういった困難を乗り越えてたどり着けたときの嬉しさは格別なものがあります。また、いずれの神社も開放的な、よい環境に位置しており、古代の忌部氏によってよくよく選定された土地であろうという印象を受けます。

忌部氏は非常に直感が鋭く、真価を見抜く氏族

――天太玉命は『古事記』に登場する神ですが、どんな役割をもっていますか。

オキタ／天太玉命は祭祀や卜占（ぼくせん）を掌り、神社自体の造営や祭祀に関わる道具全般（注連縄や鏡、大幣など）の製作にも携わる神です。

注連縄の起源は、天岩戸神話と言われていますね。弟の須佐之男命（すさのおのみこと）の悪戯に怒り天岩戸へ隠れこもった天照大御神（あまてらすおおみかみ）。太陽神の不在により光の無い世界になり世界滅亡の非常事態になりますが、八百万の神々の尽力により、天岩戸から引き出すことに成功し、世の中は再び明るく平和な時代に戻ります。この時、「もう二度と天岩戸には入らないで下さい」と天太玉命が語り、縄を張ったのが注連縄の起源と言われています。

神代の時代から注連縄は存在していたのですが、まだ神社の社殿などが存在しないため、注連縄は「ここは神域なので入ってはダメ（立入禁止）」と言う意味を持つものであり、天太玉命の一族は神社や祭祀の基本パターンを次々に開発していきます。

その後、天太玉命の仕事と方針は、歴史の中ではその子孫である忌部氏の役割へと引き継がれていきますが、天太玉命と忌部一族がもし存在しなかったとすると、今日私たちが目にする神社の姿や祭祀の内容はまったく違ったものになっていたことでしょう。もしかすると、神道そのものが今日のような形で継承されていなかったかもしれません。

忌部神社の多様な表情

忌部神社（いんべじんじゃ）　徳島県徳島市二軒屋町２丁目53－１
市街地からさほど遠くない眉山中腹に鎮座する。明治期に太政官が拠点として定めた由緒ある神社。徳島の忌部神社の代表格であり、数ある論社のなかで最もアクセスしやすいが、著名な大社クラスの神社であるにも関わらず、ほとんど認知されていない。
『延喜式』では、神々の中で特に古来より霊験が著しいとされる「名神大社」に列格された。

注：忌部氏（いんべし）
神代の時代から奈良時代（４世紀～８世紀）にかけて国家神事などに従事した氏族的職業集団。玉など祭具の製造・神殿宮殿造営に関わってきた氏族とされる。中臣氏（後の藤原氏）と勢力を争ったが、古墳時代の終わりと共に勢力が衰え、没落した。中臣氏が「政」を担当したのに対して、忌部氏が「祭」を担当していたとも言われ、中国型中央集権制度が強くなるにつれ「祭」の影響力が低下して没落したとも言われる。

ての神社を敬うべきであり、多くの人が各神社に積極的に足を運ぶように今後も呼びかけていきたいと考えています。

神道祭祀の形式を整えた忌部氏

――忌部氏は祭祀を掌っていたとのことですが、なぜ歴史的に重要な役割を担ってきたのでしょうか。

オキタ／忌部や古代史を研究している有識者の方や、神社関係者の方から聞いた話では、古代において忌部氏は中臣氏（後の藤原氏）とともに国家祭祀ならびに宮中の祭祀を司っていましたが、実は当初は忌部氏のほうが独自のノウハウを有しており、立場的にも有力であったようなのです。

例えば伊勢神宮ですが、伊勢神宮に所蔵されている『神道五部書』に、伊勢外宮の神官は阿波國の忌部神社と天村雲神社が出自であると記載されていますが、伊勢内宮については一般的に中臣がプロデュースだと言われています。ところが、内宮祭祀も元々は忌部氏が取り仕切っていたという記述が散見されるのです。その後、内宮は最終的には中臣氏が祭祀を独占するようになるのですが、神代の頃は忌部氏と中臣氏が交互に祭祀を行っていた経緯があり、『日本書紀』にも記録が残っています。

また、忌部一族の専掌であり専売特許である仕事の中に、造宮（神宮、御所、御殿の建築）があると伝えられていますが、皇居の遷移や大嘗祭の前後に大殿祭という大祭が執り行われていましたが、伊勢内宮については一般的に中臣がプロデュースだと言われていますが、実は当初は忌部氏のほうが独自のノウハウを有しており、立場的にも有力であったようなのです。

例えば伊勢神宮ですが、伊勢神宮に所蔵されている『神道五部書』に、伊勢外宮の神官は阿波國の忌部神社と天村雲神社が出自であると記載されていますが、伊勢内宮については一般的に中臣がプロデュースだと言われています。ところが、内宮祭祀も元々は忌部氏が取り仕切っていたという記述が散見されるのです。その後、内宮は最終的には中臣氏が祭祀を独占するようになるのですが、神代の頃は忌部氏と中臣氏が交互に祭祀を行っていた経緯があり、『日本書紀』にも記録が残っています。

また、忌部一族の専掌であり専売特許である仕事の中に、造宮（神宮、御所、御殿の建築）があると伝えられていますが、皇居の遷移や大嘗祭の前後に大殿祭という大祭が執り行われていました。この祭事は現世で言うところの新居の地鎮祭に当たると考えて良いと思いますが、『延喜式』

忌部神社（徳島市二軒屋町）の大鳥居前。急な階段を230段近く登ると、頂上に本殿がある。

――最終的に、いまの二軒屋の忌部神社に落ち着いたのでしょうか。

オキタ／そうですね。複数の論社が存在するという大混乱を収束させた方こそ、明治天皇ご自身だったのです。明治25年、徳島藩の中心に位置するこの場所に、新たな神社が造営され、明治天皇のご指示のもと、太政官より「忌部神社」の額が寄贈されます。同時に、忌部にまつわる神々の御霊もこの場所に移されたとされます。

現在でも本来の忌部神社がどの場所にあったのか、学術的には説が分かれるところですが、いずれの神社も阿波忌部氏ゆかりである事実は揺らぎません。ですから、私たちは現在残されている全

神社の由来が書かれた木版。祭神は、関東では酉の市の神として知られる、天日鷲命（あめのひわしのみこと）。阿波忌部氏の祖神である。

の祝詞の項目の冒頭に、「凡そ祭祀の祝詞は、御殿・御門等の祭には、斎部氏祝詞まをし、以外の諸祭には、仲臣氏祝詞まをせ」とあります。新たな社殿や御殿の造宮の際は、忌部氏が祝詞を奏上し、それ以外の部分は中臣氏が奏上しなさい、という意味ですが、忌部氏が新御殿の造立を完全プロデュースし、その前後の儀式でも祝詞を奏上していたことを考えると、皇居を神殿だと仮定した時、その神殿の宮司の役割を果たしていた一族であると考える事もできます。

――現在の大祓は中臣氏のスタイルが原型とされていますが。

オキタ／その点についても、近年の調査の結果、重大な発見がされ、異説が出てきています。現在も伝わる大祓は、「大祓詞」中臣祓詞、中臣祭文、中臣祓などとも言われますが、実際の内容を検証すると、忌部の祝詞を元に構成されている可能性が高いのです。

例えば、「安国と定め奉りて下津磐根に宮柱太敷き立て。高天原に千木高知りて皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて……」という大祓詞の一節は、御殿の造営について触れていますが、大殿祭はそもそも忌部氏の専売特許でしたから、忌部祝詞を元に書かれていると推測できます。

おおもとの忌部祝詞は遺失したとされていますが、中臣祝詞の中にその面影が生きているのでしょう。関係筋からの情報によると、水戸学派の一人である栗田寛の著作などにも、大祓の元ネタが忌部祝詞であることが指摘されているようです。

また、先帝が崩御された際、新帝の即位の礼までに数年の準備期間がありますが、先帝が崩御されたその瞬間に「践祚」が行われます。現在は「剣璽等継承の儀」と称され、宮内庁の侍従長が新天皇に三種の神器である剣と勾玉をお渡しする儀式ですが、「践祚」とは、先代の足を踏むという意味で、即位の前に忌部が新帝に剣璽を渡す事を言いました。

一方、「宮中八神」と称される、宮中ならびに国家鎮護の神が祀られていますが、その中の一柱である大宮売神は『古語拾遺』では忌部の祖神・天太玉命の子として登場しています。

――現在の祭祀の形式につながる様々な仕組みを整えたのが忌部氏だったのでしょうか。

オキタ／平安時代の初期に、斎部広成という人物が登場します。言わずと知れた『古語拾遺』を編纂した人物ですね。広成によって『古語拾遺』が著されてから、その内容が多方面に影響を及ぼし、日本史のパラダイムに大変革が起こります。

例えば、中臣氏が政権を握ってから、中臣氏系の神社が力をもち続けていましたし、『延喜式』などに掲載される上位の社もそのような神社が多かったわけですが、日本のルーツにあたる伊勢神宮や熱田神宮の重要性を広成が指摘したことで、そこに訪れる人が増えていったとされます。広成の働きかけにより、伊勢・熱田を中心とする現在の体制が強化されていったと考えられるのです。

『日本書紀』が中臣氏の立場で書かれたことを考えると、忌部氏によって著された『古語拾遺』の記述と併せて読むことが、中立的に歴史を捉えていく上で非常に重要ではないでしょうか。

山崎忌部神社（やまざきいんべじんじゃ）　徳島県吉野川市山川町忌部山 14-8
延喜式にある「忌部神社」の論社のひとつであり、平成の大嘗祭の際に織殿が造立され、麁服（あらたえ）の制作が行われた。

隠國として特別視された阿波國の不思議

――なぜ歴史的に重要な忌部氏が阿波國に集中しているのか、その点についてはどうでしょうか。

オキタ／忌部氏のなかでも阿波忌部氏が重要な役割を担ってきたのは、この阿波國という土地そのものが歴史的に重要な意味をはらんでいたからに他なりません。通説では、「忌部氏が中央から阿波に渡って、この地を開拓した」というのが定説となっていますが、実際には阿波がもともと忌部氏の発祥であったと考えられます。

朝廷が定めた忌部宿禰11家の姓（かばね）を授ける貴族の数が、中央忌部が1家なのに対して阿波國の忌部は23～24家あったそうです。奈良時代の貴族が全部で200家程度しか存在しなかったことを考えると、この数字は阿波の忌部氏が朝廷の中でいかに重要な地位であったかのひとつの証拠ではないかと思います。

忌部神社 奥社・御所神社（ごしょじんじゃ）
徳島県美馬郡つるぎ町貞光字吉良
延喜式にある「忌部神社」の論社のひとつ。古来阿波國の総鎮守とされ、四国随一の格式の大社として「四国一之宮」と称された。

――阿波という土地が他の地域のモデルとなった側面もあるのでしょうか。

オキタ／実際には関東を開拓したのも阿波忌部氏であったという事実があります。千葉県を安房國（あわのくに）と言いますが、その一之宮である安房神社（あわじんじゃ）やその周辺の神社にも阿波忌部が祀られてあり、「阿波から関東開拓のために渡ってきた」と書かれています。そもそも、安房（あわ）の語源は阿波（あわ）だったのです。

他方、神奈川の横浜に杉山神社という名称の神社が多々ありますが、こちらも日鷲の子孫である阿波忌部を祀る神社とされています。北斗七星を仰ぐ妙見信仰や造化三神のような「コンセプト」を祀る考え方も、もともとは阿波忌部氏の概念であったとする見方も強いようです。

また、阿波には、隠された古代の遺跡がたくさん存在している確固たる事実があります。萩原2号墳は、奈良の箸墓（はしはか）古墳の原型となったとされる古墳です。以前までは箸墓古墳のコピーと言われていましたが、近年の調査で箸墓古墳よりさらに古いことが分かっています。阿波の古墳群は、古墳時代よりさらに時代を遡る最古のものですが、古墳と認定すると史実が揺らいでしまうという理由から考古学の先生は「古墳ではなく墳墓である」と言っているんですよ。

私はこのことを残念に思っていますが、徳島の古老に話を伺うと、皆さん「阿波は〝隠國（おんごく）〟だから」と仰るのです（笑）。〝隠國〟というのは「隠された国」という意味ですね。どうやら、この場所には、本当に重要な日本のルーツが隠されているのではないかと感じています。

インタビューより編集構成／石黒壮明

種穂忌部神社（たなぼいんべじんじゃ）　徳島県吉野川市山川町川田村種穂山
“忌部神社”の名がつく古社であり、論社のひとつだが、一般的にはあまり知られていない。山崎忌部神社と同じ山川町の種穂山の山頂に鎮座しており、険しい勾配の道のりのため、到達するのが困難。道順も詳細が公開されていない。

種穂忌部神社の一の鳥居を訪れたオキタ。背後に社殿のある種穂山が聳え立つ。